

## 「オンライン版 市川房枝資料 1905-1946」 解題

井上 直子（法政大学 ほか）

市川房枝資料（以下適宜「市川資料」）は、市川房枝（1893-1981）が残し、現在市川房枝記念会女性と政治センターに整理所蔵されている1905年から1946年までの史料のうち、3700件以上を収録したものである。

ここでは、市川資料がいかなる経緯で保存、閲覧に供されていたかという過程と、その内容を紹介する。婦選運動史に限らず、市川資料の持つ多面的な魅力を伝えられるよう努めたい。また、オンライン版の構成にしたがって各部史料群の概要を紹介する。

### 市川房枝資料の来歴と構成

市川房枝資料は、市川房枝の生涯と彼女の生きた社会が浮かび上がるような史料群である。なぜなら時期に偏りがなく残存状況も良いからである。さらに、その内容も多岐にわたることが特徴である。たとえば、市川が仲間と結成し運動の拠点とした婦選獲得同盟や婦人時局研究会、新日本婦人同盟（日本婦人有権者同盟の前身）などの団体資料と自身の原稿・メモや収集資料、来信を中心とした書簡に加え、市川や婦選獲得同盟と接点のあった諸団体資料などがある。したがって、これは市川房枝本人はもちろんのこと、彼女が見、携わってきた多様な運動の数々を多角的に分析考察することが可能な史料群であると言えよう。婦選運動史、女性史・ジェンダー史に限らず、政治史、経済史、社会福祉史、教育史、メディア史といった立場からも検討に資する史料群である。

この保存状態の良さは、もともと市川自身が今でいうアーカイブズの重要性を自覚していたことに起因する。市川は、1944年、のちに養子となる真下ミサオとともに南多摩郡川口村に疎開したが、婦人問題研究所事務局のある東京市四谷も空襲が激しくなり、1945年3月下旬には図書や各組織の文書とともに婦人問題研究所事務局の機能も川口村に移転させていた。各組織の文書としては、婦人参政権獲得期成同盟会前後から保存してきた婦選獲得同盟や婦人問題研究所などが挙げられ、市川資料の中核を占める。この判断により、多くの資料を戦火から守ることとなった。戦後まもない1946年に念願だった婦選会館が建てられ、会館には婦選図書室も設けられた。ここに先の図書や文書が収められた。

さらに、先の図書や文書は当時市川房枝記念会常務理事の児玉勝子により整理され、同評議員の安田寿子に引き継がれた。その後、1997年に婦人参政関係史資料整理企画委員会が設置され、保存・マイクロフィルム公開に向けた整理がなされた。そして、第Ⅰ期分として2005年、マイクロフィルム「婦人参政関係史資料Ⅰ」を刊行した。ここに、新婦人協会から新日本婦人同盟に至るまでの1918年から1946年の史料が収められた。

なお、第Ⅰ期に収録できなかった未整理史料と戦後史料については第Ⅱ期分としている。第Ⅰ期刊行後、婦人参政関係史資料整理企画委員会に参加した元国会図書館政治史料課主

査の山口美代子が、婦選会館に集うボランティアの人びととともに整理・保存を進めてきた。山口亡き後も引き続き整理が進められている。

市川房枝資料は、第 I 期のマイクロフィルム版をベースにしつつ、新たな史料も加えオンライン版として刊行するものである。以下、各部の内容について紹介することとしたい。

## 第一部 婦人参政権獲得期成同盟会、婦選獲得同盟本部資料

市川房枝は、1893 年に愛知県中島郡明地村に生まれた。彼女は、母の置かれた立場、父と母の関係を最初のきっかけに、女性の権利について深く考えるようになる。そのため、高等小学校時代にはすでに「女も人間である、女のために働き度い」という思いが芽生えていた。愛知県女子師範学校を卒業後、小学校教員、新聞記者を経て 1919 年に平塚らいてうらと新婦人協会を結成した。新婦人協会は衆議院議員選挙法改正などの請願運動を進め、1922 年に女性の政治活動を禁ずる治安警察法第 5 条 2 項を改正し集会権を獲得した。

市川はその前年の 1921 年、新婦人協会の役員を辞して渡米し、アメリカの女性参政権獲得運動の歴史と女性の政治参加の実際を目の当たりにする。1924 年に帰国すると同年末に婦人参政権獲得期成同盟会を結成し、以後ここを拠点に婦選運動を進めていく。なお、同時に市川は ILO 東京支局の設立にも関わり、開設後は職員として勤務していた。

この第一部に婦人参政権獲得期成同盟会の史料が収められている。結成まもなく市川らは運動を開始し、第 50 議会（1924 年 12 月～1925 年 3 月）には参政権・公民権・結社権の三権を求めるいわゆる婦選三法案が提出された。「婦人参政関係法案の提出案について希望条項」（1925 年 2 月 16 日、資料番号 2257\_7）は、婦選三法案を提出すべく婦人参政権獲得期成同盟会が賛同議員に提出した「希望条項」である。ここでは、参政権に該当する衆議院議員選挙法は建議案として、公民権と治安警察法第五条一項については独立の改正法律案として提出するよう、2 月下旬には上程するよう希望を述べている。この希望条項が出される 4 日前、市川らは代議士招待会を開催している。こうした会合等を通して婦選に賛同する議員と議論を重ね、対議会運動を進めていった。本資料は議員との協力関係の延長線上にある資料のひとつである。以後も賛成議員とともに粘り強く続けられる対議会運動の姿勢が打ち出された資料といえよう。その後の経過も少したどっておきたい。市川らの希望を容れて婦選三法案が提出されると、衆議院を通過したが、貴族院で審議未了となってしまった。結局この議会では年齢や居住地などに応じて一定の条件を満たした 25 歳以上の男性のみに参政権を与える衆議院議員選挙法改正（いわゆる男子普選法）と治安維持法が成立した。

同年 4 月に開かれた第 1 回総会で、婦人参政権獲得期成同盟会は婦選獲得同盟に名称を変更する。婦人参政権獲得期成同盟会以来の事務局日記や来信書簡、発信簿、会計書類など事務資料もこの第一部に収められている。婦選獲得同盟への改称から解散まで本部資料が一貫して揃っており、婦選獲得同盟がいかなる模索を経ながら組織として活動を続けてき

たかをつぶさにたどることができる。特に事務局日記と会計資料、来信類は結成の1924年から解散の1941年に至るまで連綿と残されている。これらの史料から、組織としての動向のみならず、いかなる模索を経ながら運動を続け会を存続させてきたかをつぶさにたどることができる。

第一部も次の第二部も婦選獲得同盟の資料群であるが、なかにはその時々々の市川個人のメモもある。「昭和9年度総会用市川メモ類」（資料番号2271）には、「方針」として「▼婦選獲得の議会運動を盛にする事 ▼例へば母子扶助法案等婦人問題をも取上る事 ▼会員機関雑誌 誌友の集り」など書かれている。例えば母子扶助法案は、当該期、婦選獲得同盟が母性保護連盟等とともに法制定をめざし熱心に取り組んだ運動のひとつであるが、この総会でも重要な議題として挙がっていたことがわかる。この母子扶助法への姿勢に限らず、その後の婦選獲得同盟の活動はメモ内容と符号する点が多い。別の箇所には「獲得の方が力がそがれてゐた。波に逆ふ。波にのる。波をさける。」と、当時の苦しい運動の胸の内が垣間見えるようなメモもある。断片的であっても市川の考え、思いに触れることができる貴重な資料である。市川が婦選獲得同盟の中核で組織を支える活動もし続けてきたからこそこの組織資料に残され引き継がれてきたといえる。

## 第二部 婦選獲得同盟委員会資料

第二部は、婦選獲得同盟の具体的な運動、組織の軌跡と活動内容をたどることができる資料群である。

第一部でも触れた婦選獲得同盟への改称にともない、同盟は、事業内容に応じた委員会を設け、組織を再編した。すなわち、中央委員会、議会運動委員会、政治教育委員会、調査委員会、出版委員会、財務委員会、会員委員会を設置した。この組織形態に依拠して各委員会に残された資料が整理されている。いずれの委員会も、自身の担った活動に関わる資料のみならず、委員会記録や速記録といった会議資料も残している。したがって、それぞれの委員会の活動と会議資料等を突き合わせることで、婦選獲得同盟の幅広い運動とそれを維持するための諸活動を捉えることができる。以下、各委員会の役割と資料概要を述べていく。

中央委員会は、総会を担い運動の方針を決める役割を務め、これに沿って他の各委員会がそれぞれの運動を進めた。したがって婦選獲得同盟の運動方針を知るためには中央委員会の資料を紐解くことが欠かせない。中央委員会の会議議事ノートなど貴重な資料も残されている。

議会運動委員会は婦選三法案や請願の提出、婦選を支持する候補者の応援、選挙浄化運動などを推進した。婦選獲得同盟が独自に進めた選挙浄化運動に関する資料（声明やビラ、応援演説のスケジュール、候補者へのアンケートなど）も充実しており、政治史や当時の選挙運動状況を検討するうえでも有意義な資料群である。

政治教育委員会は研究会や講演会・全国遊説の計画実施など広く政治教育と同盟の普及

運動を担った。計画書やビラ・ポスター、通知のほか、講演会・遊説にあたっての来信書簡が多く残されている。

調査委員会は運動にまつわる各種収集資料を作成している。たとえば、世界各国の女性参政権獲得状況や国内の女性の官公吏数を調査しまとめた資料、海外からの来信・交換雑誌、東京市の塵芥処理・衛生行政に関する市役所刊行資料などが挙げられる。当時の社会状況を把握するうえでも重要である。

会員委員会は会員や支部を担当していたため、本資料群のなかでも婦選獲得同盟に集った人びとの顔がよく見える資料群となっている。入会・退会に関する来信類、各支部の活動資料（規約、会員名簿、支部主催の講演会等のビラ・ポスター、支部総会や支部発行物、送付資料など）と来信類などが見られる。婦選獲得同盟に集い支えた人びとと市川ら婦選獲得同盟幹部の交流がよくわかる資料である。

財務委員会は主に運動資金に関する会計資料を多く残している。特にユニークなものとして、運動資金を集めるため1930年に発足した代理部資料がある。婦選獲得同盟は代理部を通して絵ハガキや牛乳、化粧品などを販売していた。婦人参政権獲得期成同盟会時代には観劇会を開催しており、その時以来の観劇会関係資料もここに収められている。いずれも宣伝のためのビラや購買者リスト、売上表、購買者からの来信などが整理されている。

出版委員会は、この第二部では請求書や払込通知票など会計書類が主で、会誌そのものに関する資料は次の第三部『婦選』『女性展望』『Japanese Women』資料に収められている。

### 第三部 『婦選』『女性展望』資料、婦人時局研究会・婦人問題研究所資料

この部は、婦選獲得同盟が刊行してきた『婦選』『女性展望』『Japanese Women』に関する史料群と、婦人時局研究会、婦人問題研究所、新日本婦人同盟の史料群の2部構成となっている。

『婦選』は1925年、婦選獲得期成同盟会の会報として創刊された。1927年より機関誌として発行し、会報は別途『婦選獲得同盟会報』と分けられることとなった。

しかし、1936年に誌名改題を余儀なくされる。そこで、より読者を拡大させるためにも一般誌として『女性展望』と改題刊行することとなった。販売形式についても、街角にサンプル誌を置く、雑誌購読者を対象とした詩友会の組織化といった工夫がなされ、販路拡大に努めた。婦選獲得同盟解散後は女性展望社を発行元とし、従来の誌面スタイルを変えず、婦選獲得同盟に替わり婦人問題研究所、時局研究会の活動を伝えた。しかし1941年8月号を最後に、雑誌統制のあおりを受け廃刊となってしまった。

『婦選』『女性展望』資料は、刊行の舞台裏を目の当たりにすることができる資料群である。いずれも、市川をはじめとした婦選獲得同盟の面々、そして同盟が依頼した多彩な執筆陣による入稿原稿や漫画・挿絵の原画、誌面アンケートの回答などの原稿、座談会や編集会議の記録ノート、購読・購読停止依頼や誌上名刺交換等の書簡などが揃っている。先に確認

した各雑誌の変遷がわかる当局提出資料、また広告、検閲関係、会計報告などの書類群もある。特に原稿やアンケート回答は見ているだけでも楽しく、刊行された誌面と見比べ検討することで新たな発見もあろう。

『Japanese Women』は1938年1月、タイトルにもある日本女性の動向を海外、特に英語圏へ広く発信するために創刊された英字新聞である。1940年まで16号刊行されている。大月照江が編集刊行を一手に担い、日本の女性運動や情勢の発信を続けた。この資料群には発行手続きや購読者の来信があり、第四部に大月照江の資料群が収められている。

いかに機関誌・雑誌が成り立っていたか、廃刊の時を迎えたかといった点も追えるこの資料群は、雑誌・出版・メディア史研究の観点からみても興味深いのではないかと考える。第二部の出版委員会、第四部に収められている検閲関係資料なども参考になろう。

後半部は戦時期、そして敗戦後の市川の精力的な活動を窺い知れる婦人時局研究会、婦人問題研究所、新日本婦人同盟の資料群である。いずれも市川が戦時下、そして戦後まもなく自身の拠点として会員とともに研鑽を深めた場であり、市川が守り続けた場でもある。

婦人時局研究会は、1939年、内閣情報部等と連絡しつつ、女性指導者の時局認識を深め政策研究を行うことを目的に組織された。そして婦人問題研究所は、婦選獲得同盟15周年を記念して1939年に再建された（設立は1925年）。この2団体の資料として、それぞれ設立関係資料、理事会や定例研究会等の記録や作成文書、女性団体や国策に対する調査研究資料・提言資料、来信書簡、会計資料、名簿など会の活動を解明できる資料が確認できる。これらの史料から、各会や市川の活動のようすと考え方を捉えることができる。

また、婦人問題研究所では図書の出借も行っており、貸出図書一覧表や出納状況を記す図書貸出票も残されている（「婦人問題研究所貸出し図書一覧表（昭和19年6月30日現在）」資料番号2775\_2、「図書貸出票 婦人問題研究所図書室 昭和19年8月-20年7月」資料番号2776）。

戦火の動向も生々しく史料に残されている。4月13日の城北大空襲の被害を受け、婦選獲得同盟以来四谷にあった婦人問題研究所事務所は焼失した。しかし、市川らは引き続き会合等に用いるため竹内茂代の厚意により四谷の井出病院内に分室を置いた。研究所移転通知ハガキには「事務所宿泊中の市川、斎藤は無事で御座いましたが、事務所の資料の一部、事務用品の大半を失ひましたことを申訳なく存じて居ります」と書かれている（資料番号2777\_5）。文中の「斎藤」は婦人問題研究所事務局員の斎藤きえのことである。ところがこの分室も山の手空襲で焼失し、市川は移転先探しに奔走するなか敗戦を迎えた。

それでも、残された史料から、戦後の再開は早かったことがわかる。市川は8月25日に戦後対策婦人委員会を立ち上げ、翌月付で第1回目の「政治委員会御通知」を出し、「選挙法の改正等について御相談申上度存じますからぜひ御出席願ひ上げます」と書いている（「婦人問題研究所東京仮事務所及び市川東京仮住居 転居通知（昭和20年9月）」資料番号2777\_6）。10月には婦人問題研究所の会員に宛てて、新団体・新日本婦人同盟の結成について説明している（「戦後事業再開、事務所移転等会員宛挨拶 市川房枝（昭和20年10

月)」資料番号 1186)。そして 11 月、新日本婦人同盟の結成となった。「新日本婦人同盟 (仮称) 要綱 (試案)」には、「差当っての運動」として「立法、行政の諸機関への婦人の参加の実現、並にこれが行使に備へるための啓蒙運動を展開する」とある(「新日本婦人同盟 (仮称) 要綱 (試案)」資料番号 2816\_2)。

上記以外にも、戦後対策婦人委員会、新日本婦人同盟に関する資料は収録されている。例えば、結成に向けた準備会資料や規約、会報、名簿、会計資料、食料問題などの調査資料、またわずかながらも懇談会や映画会の通知、青梅支部資料や支部ニュースがある。市川が公職追放となり新日本婦人同盟会長を辞任する前年の 1946 年までの資料が収録されている。

#### 第四部 一般婦人団体・組織資料、主題別資料(1)

この部には、「一般婦人団体・組織資料」と「主題別資料」の前半部分が収められている。

「一般婦人団体・組織資料」には、市川、婦選獲得同盟と運動をともにした団体、あるいはなにがしかのかたちで接点を持った団体の史料がまとめられている。「主題別資料」は、市川、ないし婦選獲得同盟がその一端を担った活動により集まり残された諸資料が収められている。市川房枝研究、女性史・ジェンダー史研究に限らない幅広い多様な関心からのアプローチに応える資料群である。

「一般婦人団体・組織資料」には、多様な女性団体の史料が収められている。すなわち婦選運動で関係の深かった婦人参政同盟、日本基督教婦人矯風会、母性保護連盟といった団体はもちろんのこと、関東婦人同盟をはじめとした無産婦人団体、愛国婦人会、国防婦人会などの官製婦人団体、地域婦人会、汎太平洋婦人会議などである。これらの多くは市川、ないし婦選獲得同盟に宛てて送られた通知やパンフレットといった文書類であり、市川が左派・右派を問わず女性団体の大同団結をはかろうとした姿勢を示すような史料群である。戦時には、日本婦人団体連盟、大日本婦人会の史料が多くみられる。この戦時下の団体資料の多さは「一般団体・組織資料」の傾向とも同じである。「一般婦人団体・組織資料」に続く「一般団体・組織資料」には、大政翼賛会の中央協力会議や調査委員会資料が見られる。加えて、ILO 東京支局など市川に馴染み深い団体資料もある。

「主題別資料」にも、多岐にわたる資料が数多く収められている。市川が関わった運動や労働問題・経済問題、また選挙・選挙粛正運動や議会、地方行政、政党、国民精神総動員などの国策・戦時生活関係、学校教育、青年団に関する史料、調査収集資料である新聞・雑誌の切り抜きやパンフレット、またステッカーや紙芝居などがその例である。ここでは特に、政治史研究に資する東京市政史料を紹介したい。

東京市政に関する資料は、大分類「東京市政問題」「東京市内施設関係」「東京中央卸売市場問題」「東京府会・市会議員選挙関係」にまとめられている。市政革新同盟、東京愛市連盟、また市川が中核を担った東京婦人市政浄化連盟、東京婦人愛市協会など東京市政の改善を訴えた諸団体資料も含まれている。愛市運動については初年の 1937 年のものが有名だが、

その後の資料も収められており、運動の経緯も追跡可能となっている。ここに挙げた項以外にも東京府市に関する資料は選挙粛正運動、国民精神総動員運動、町内会など戦時下にかけても散見される。これは、市川が長く東京市に対する運動を進めてきたことに起因する。第二部にも市川ら婦選獲得同盟の立場から取り組んだ東京市政関係資料と東京支部の資料、また第五部には東京市政に特化した市川の直筆ノートがある。併せて参照されたい。

さて、この第四部収録の「東京市政問題」には、市川が最初に携わったガス料金値下げ運動（1929年）、1932年以来取り組み続けた尿尿処理問題とごみ運動、都制案に婦人公民権を盛り込もうとした1932年の婦選運動、1934年のいわゆる「女中」税などの増税反対運動資料と、別項立てとなった中央卸売市場問題以外の多岐に渡る市政関係資料が確認できる。

特に日々の暮らしに関わる市政について、市川ら婦選獲得同盟、また東京婦人市政浄化連盟（以下「浄化連盟」と表記）は視察調査を実施したうえで、政策提言を行うなど改善の声をあげていた。なお、浄化連盟は、1933年に婦選獲得同盟東京支部ら東京市内の女性団体が糾合して結成されたものである。

例えば尿尿処理について、浄化連盟は、従来民間の汲み取り業者が行っていた尿尿処理を、全面的に市営化しようとした東京市の動きを注視していた。すなわち、浄化連盟は、1934年11月に市会が決めた旧市内を対象とした尿尿処理の全面市営化を評価し、さらに尿尿処理手数料を今後低減ないし全免とすること、新市域にも市営の範囲を拡大することなどを要望した（「尿尿の市営に関する声明書 東京婦人市政浄化連盟（昭和9年10月）」資料番号3193\_1）。この声明書と同じ資料群内には、尿尿汲取りの市営化をめぐる費用の見積もり表があるほか（資料番号3193\_1）、2年前に出された「東京市直営尿尿処分事業概要 保健局清掃課（昭和7年6月）」などが残っている。他の運動と同様、運動の際に用いた収集調査資料もともに残されている。そのなかの「東京市直営尿尿処分事業概要 保健局清掃課（昭和7年6月）」の表紙には「東京支部」と朱書きがされており、この資料を同支部が活用していたことがうかがわれる。資料は、このように臨場感あふれるものである（資料番号3196\_2）。

他方、市川ら婦選獲得同盟、東京婦人市政浄化連盟は、東京市と協力しながら1933年～1934年を中心にごみの分別やごみ処理場に関する啓発運動、いわゆるごみ運動も行っていた。このごみ運動を通して、市川らは東京市のごみ処理についても注視し、提言を進めたのである。ごみ運動の過程で市川らは、市内各地で講演会を開くのみならず、余興で自作劇「お春さんの夢」も公演した。これは、「女中」のお春さんを主人公に、お茶ガラや新聞紙、魚の骨や石も登場して、ごみ分別の方法とその重要性を訴えかける内容である。脚本は婦選獲得同盟の金子しげりが担当した（「お春さんの夢」（ゴミ問題の自作自演劇）台本 東京婦人市政浄化連盟（昭和8年7月）」資料番号1648）。

もうひとつ、金子が脚本を担当した作品が残されている。次の第五部に収められているため、部を改めて紹介したい。

## 第五部 主題別資料(2)、市川房枝関係資料

この部には、「主題別資料」の後半部分と「市川房枝関係資料」が収められている。

「主題別資料」の大分類「雑資料」・小分類「紙芝居」には、複数の紙芝居もある。この紙芝居のひとつが、金子が脚本を担当した1940年刊行の紙芝居「お花さんの日記」である。

「お花さんの日記」は、女性の立場から、選挙粛正運動で強調された理想選挙を実現させるよう謳う紙芝居である。この奥付には東京府選挙粛正実行部・選挙粛正中央連盟指導、市川房枝発行とある。

紙芝居は、主人公である「女中」・お花さんが「奥様」の代理で隣組常会に出席するシーンから始まる。府会選挙を前に男女問わず理想的な候補者像を話し合う常会、この常会を経て「奥様」同士、また「女中」同士が連携し「旦那」に投票させようと奔走する内容が描かれている（「お花さんの日記」 金子しげり作（昭和15年5月）女子公民教育協会、資料番号3282）。

この選挙粛正運動にかかわる紙芝居以外にも、貯金、出産などをテーマとした1940年前後の国策紙芝居が本オンライン版に収録されている。近年の国策紙芝居についての研究を念頭におけば、これらの資料もまた女性史や政治史のみならずメディア史的な方向など、多角的な研究に供されるであろう。

後半の「市川房枝関係資料」は、婦選獲得同盟や婦人問題研究所に限らない市川個人の資料群で、これら収録史料を通してより彼女自身に近接できる。具体的には、前述の市政改善や婦選運動に奔走した時期の日記・手帳・ノート、来信と自筆書簡、原稿草稿、そして調査収集資料を含めた文書類である。なかには、「地方講演・視察関係」（1930-1944）「訪米旅行関係書類」（1921-1922,1924,1928-1929）「中国・台湾旅行関係」（1939-1940,1942）と、出来事に応じてまとめられた資料群もある。最後に掲載されている「市川房枝伝記資料」は、そのすべてが、マイクロフィルムに収められていない新規収録の資料である。

「中国・台湾旅行関係」も市川自身の関心がうかがえる資料群のひとつである。1940年、竹中繁とともに旅立った中国で、市川は新中央政府、居留民によって組織された上海自粛会などと接した。その諸団体の資料、また現地の新聞、ビラ・ステッカー・ポスターなどを丹念に集め保存していた。たとえば、訪ねた市で得た投票用紙や注意事項、組織図といった選挙資料群（「建鄴市（南京）関係資料」資料番号3345）、市川が会った時に手渡されたのであろう上海時局婦人会機関紙「婦人第一線」第3号（1939年8月12日付、資料番号3359）などが見られる。このとき、市川は中国旅行について『女性展望』や新聞に現地レポートを書き送っていた。その後も中国在住の日本人女性との交流も続くが、こうした市川の活動、日中友好模索の一端をよく示す資料群である。1942年の台湾旅行はあくまで講演登壇のためのもだったが、中国と同様、調査収集資料も確認できる。さらに、市川が台湾で書き残した貴重な原稿類・メモも存在する。すなわち、現地ラジオの原稿、「台湾から帰って」と

題した原稿などがある（資料番号 3341\_2）。近年、市川と日中関係については研究が進められており、この資料群を通してさらに検討を深めることができると考える。

最後に紹介したいのは「市川房枝伝記資料」である。これは、市川の日記・ノート資料群で、市川が高等小学校2年生だった12歳（1905年）から愛知県女子師範学校を卒業する20歳（1913年）までの学生時代のもの、名古屋新聞記者となって2年目、平塚らいてうと出会う25歳（1918年）の日記、1928年の汎太平洋婦人会議の日記・ノート以降、1946年までの日記・手帳・ノートが収められている。

1点だけ、筆者が市川らしいと感じた日記を紹介したい。高等小学校4年生（1906年）の夏休みの日記では、毎日ページ上部に書かれる課題をこなし、下部の行動記録を午前・午後・夜に分け書き記している。8月9日の課題には菊水紋が描かれ、「男子は奇麗に彩色し女子は白紙にうつして縫ふのです」と出されている。市川は黄色と水色で彩色したうえで裁縫の課題を行ったようである。これに対し「縫ふのはどうしたのですか。後にありました」「きれいになりました」と朱書きがなされている。男女別に指示を出す課題に対し違和感を持ったのだろうか。両方の課題に取り組む姿勢は、後の市川を彷彿とさせる学生時代の1ページと感じられた（資料番号 D-1-2-2）。

## 結びに

以上、各部に沿いながら市川房枝資料の概要とともに、なるべく市川の活動や思い、人となりが見える資料、政治史など多角的な視点から検討するに値する資料を選び紹介してきた。地域の婦選運動、市政改善と市川房枝に関心を寄せるひとりとしての史料紹介となってしまうが、多様な資料が連綿と揃っているからこそ、さまざまな立場から市川房枝資料にアプローチされ、新たな市川房枝像や日本近代史が叙述されることを願っている。

## 参考文献

- ・伊藤康子『市川房枝』（ドメス出版、2019年）
- ・神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター「戦時下日本の大衆メディア」研究班『国策紙芝居からみる日本の戦争』（勉誠出版、2018年）
- ・進藤久美子『市川房枝と「大東亜戦争」』（法政大学出版局、2014年）
- ・進藤久美子『闘うフェミニスト政治家市川房枝』（岩波書店、2018年）
- ・菅原和子『市川房枝と婦人参政権獲得運動』（世織書房、2002年）
- ・源川真希『近現代日本の地域政治構造』（日本経済評論社、2002年）
- ・源川真希『東京市政』（日本経済評論社、2007年）
- ・村井良太『市川房枝』（ミネルヴァ書房、2021年）
- ・山崎真紀子、石照子、須藤瑞代、藤井敦子、姚毅『女性記者・竹中繁のつないだ近代中国』

と日本』(研文出版、2018年)